

《天童広重》

天童織田藩は、窮迫した藩の財政対策の一環として歌川広重(1797~1858)に多くの肉筆画を依頼した。その数200~300幅と言われている。広重晩年の円熟期に描かれたこれらの作品群は、「天童広重」として高く評価されている。最近も新たに市に戻った肉筆画が話題となった。

広重と天童の縁にちなんで、生誕200年にあたる平成9年4月、広重美術館が誕生し、広重の作品を観賞することができる。



《織田藩の人物》

よしだ だいはち 【吉田大八】

天童織田藩家老 勤皇の志士

天保3年(1832年)、江戸天童藩邸に生まれる。15歳で父の跡を継ぎ、要職を経て中老。江戸では安積良斎に就いて儒学を学んだ。天童では、藩財政の立て直しに取り組む。戦争の中、桂太郎と出会い、その才を見込まれたと言われる。奥羽列藩同盟が成立するにおよんで、藩の責任を負い、明治元年6月(1868年)切腹した。享年37歳。

みやぎ こうぞう 【宮城浩蔵】

明治法学校(現、明治大学)の創始者のひとり

嘉永5年(1852年)天童藩御典医の次男として生まれた。戊辰戦争では、吉田大八の直属の部下として転戦。のちに法治国家を目指し法学校を興した。吉田大八を師と仰ぎ、その影響を受けたと言われている。

あだち かね 【安達鏡子】

国際司法裁判所長

安達峰一郎夫人

織田藩士の高沢佐徳長女。明治3年生まれ。「世界の良心」と言われた安達峰一郎を内助の功で支えた。

夫亡き後は、国際法研究の後継者育成に尽力。宮事にも仕え、大正天皇皇后からの信頼も厚かった。

《将棋駒》

天童は、全国の95%の将棋駒を生産する将棋駒のまち。これは、天童織田藩の下級武士の生活の足しにと内職させた駒づくりが発祥。

家老の吉田大八は、「将棋は戦法を鍛えるもので、駒づくりは武士の面目を傷つけるものではない」としてこれを奨励したという。

信長も、将棋・碁を好み、大橋宗慶に将棋を学んだ。大橋宗慶は、「桂馬の使い方が巧妙」と信長の言葉で桂の一字をもらい、宗桂と改めた。



＝ 織田の茶道 ＝

織田藩と茶は深い縁にある。茶の湯を愛した信長。織田信長の実弟織田長益(有楽斎)は茶道の流派「有楽流(うらくりゅう)」の祖。天童織田藩祖信雄も有楽斎に茶を学んだと言われている。

有楽斎は、晩年、建仁寺に入り、茶道の最高峰とも言われる如庵(国宝)を建立し、大名武家茶道の創始者とも言われている。



《紅花》

芭蕉が、「まゆはきを俤にして紅粉の花」と句を残したように、天童は最上紅花の一大産地であった。紅花商人が帰りの船に雛人形などを積んできてこの地に華やかな京・江戸文化をもたらしたと言われている。天童織田藩では、財政政策の一環として紅花の専売をはじめた。